

[講演会抄録]

2012年度連続研究講座：
グローバルゼーション下の若者
第1回「『若者』とは何者なのか
ナイジェリア社会に見るその不満と暴力」

2012年4月19日

望月 克哉（本学国際社会学部 教授）

はじめに

本日、皆さんには、若者という言葉について、その意味合いは何か、それをどのように捉えたらいいか、という問題を考えるヒントを差し上げます。これからの連続研究講座を通じて、どのように若者というものがとらえられているのか、を考えていってほしいと思います。この授業「グローバルゼーションと日本」で皆さんが学ぼうとしているグローバルゼーションという現象、その中で皆さんを含めた若い世代がどのような問題に直面しているのか、というのが基本的な問題意識です。それを様々な側面からとらえてみようという試みです。ただし、あまり理念・概念だけで話しても興味が湧かないと思うので、できれば具体的な経験を話してみようと思い、自分のフィールドであるナイジェリアという国の事例から紹介していこうと考えています。

若者という言葉

早速、若者という言葉について考えてみましょう。何か新しい概念とか言葉を使おうとするときには、まず辞書を引くようにしています。本当に言葉の使い方が正しいのか、ということをまず確認してみなければなりません。まずは『広辞苑』の第1版第10刷という昭和30年代に出

版されたものを探してきて調べてみたのです。「若者」という言い方は、とてもあいまいで、「年若い人」、「わこうど」を意味し、「青年」に通じるとされています。しかし、これらが同じ意味なのか、違うのか、よく分かりません。そこで今度は、「青年」の項目を引いてみると、「【青年】14,5歳から24,5歳位の人」と書いてあるのです。14～15歳からを青年と呼ぶことに、違和感はないでしょうか。この版が上梓された昭和30年代というのは、日本経済が右肩上がりでもんもん伸びていた頃なので、14～15歳から24～25歳というのが青年の年齢の幅になっていたことが、古い『広辞苑』の記述から窺い知ることができるのです。

もちろん辞書の記述というのも、時代を下るにつれてだんだんと変わってきます。今度は昭和58年（1983年）の『広辞苑』で「青年」の項をみると、「青春期の男女。多く14,5歳から24,5歳の男子をいう」とあります。受講者の皆さんは、ちょうどこの年齢の幅におさまっているわけで、女性として心外に感じるかもしれません。辞書に記載されていることは、本当に自分たちの社会における一つの概念を、きちんと言い当てているのでしょうか。辞書で引いたのだから、それは正しいとは、言い切れないと思うのです。今日の講義のタイトルには若者という言葉掲げていますが、これからの話の中では若者と青年という言葉を両方使っていきます。いずれもあいまいですけれども、それらが若い世代、皆さんに近い世代の人びとを指しているということだけを、まず理解しておいてください。

さて、若者という言葉について、これを日本語だけで済ませるわけにはゆきません。次に身近な言葉は英語なので、権威ある英語の辞書で「若者」を意味する単語youthを検索してみることにしました。とりあえず出かけた図書館にあったのが、1933年に出版された*The Oxford English Dictionary*だったので、これを引いてみたところ、「若い人びと young

people (or creatures)」を、「集合的collectively」にあらわすとありました。とりわけそれは「若者the young」、すなわち若者・青年を意味するということなのです。さらに、もう一つの意味合いとして、A young person; especially a young man between boyhood and mature age、つまり「少年期boyhood」と「成熟した年齢mature age」の間にある若者とありました。子どもから少年、若者、青年に移っていくことと解することができます。まさに皆さんの世代なのです。とてもあいまいで、とても不安定で、とても不安な世代なのです。そのような若者、青年を取り巻く問題。今日のグローバリゼーションの世界、国境がなくなるボーダーレス世界で、めまぐるしい速さで社会が変わる中で、皆さんの世代がどのような問題や困難に直面し、どのような課題を抱え込んでいるのかということ。こうした一連の問題がこの連続研究講座の底流にあるテーマなのです。

ナイジェリアの若者たち

アフリカ大陸の人口はいまや7億近くになっているわけですが、今回取り上げるナイジェリアという国の人口も1億5千万にせまっています。アフリカの地域区分で言うと西アフリカということになります。ただし皆さんが習った地理の教科書では「中南アフリカ」と区分されているかもしれませんが。この国の形を細かく見てみましょう。植民地時代に引かれた国境線が、独立を達成しても変わることはありませんでした。国境というものは、それほどあいまいなものなのです。ナイジェリアという国の領域は、だいたい北緯3度から13度までですから、赤道直下ではないのですが、気温も高く、雨も多いという土地柄で、そこに住む人びとの暮らしぶりは、わたしたちとは随分と異なっています。今日お話しする若者たちが暮らすラゴスという都市は、植民地期以来ずっとナイジェリアの首都でした。2006年の同国の国勢調査で、すでに総人口が

1億4千万を超えていましたから、現在では1億5,500万人に達していると推計されています。この人口大国で最大の都市がラゴスで、人口は、ラゴス都市圏と言われているところで1,000万人を超えていると言われます。世界の開発途上国の中でも恐らく最大級の都市圏と言えます。日本に比べると若い世代の人口の多いのが途上国の特徴ですから、皆さんから下の世代、いわゆる若者と子どもの世代の人口が膨大であると考えていただけたらと思います。

ナイジェリアはもともと農業国だったのですが、植民地期の1950年代末に石油資源が発見されたことで、独立後10年ぐらいつと石油産業が経済の基幹部門となりました。その石油の産出地域というのが同国の沿岸部にあり、今日のお話で取り上げる事例の一つも、この産油地域で起こった出来事ということになります。農業国であったナイジェリアで実際につくられている作物というのは、実にさまざまでした。熱帯で雨がたくさん降る地域なので、非常に多くの作物ができるからです。熱帯作物として日本のサトイモの類（現地名は「ココヤム」、アジアではタロイモ）であるとか、日本で言うと長イモみたいなイモ類（現地では「ヤム」もしくは「イニヤム」）、それからキャッサバ（マニオクとも称される）の類になります。さらに雑穀、日本ではアワとかヒエの類がよく食べられています。皆さんにとって意外かもしれませんが、西アフリカというのは世界のイネの原産地の一つなのです。アフリカ原産のお米というのは、日本のお米とも違うし、インド料理屋さんで食べるようなお米とも違います。耕作の仕方も日本やアジアとは違って、田んぼではなく、イネの畑で育てています。つまり、水田耕作、灌漑稲作ではなく、降雨に依存した天水耕作になります。

皆さんに知ってほしいのは、若い女性たちがイネの畑に出て、草取りのように負担の大きい労働をしていることです。イネが雑草に負けてしまうと収穫量が減ってしまうので、一生懸命に草取りをしてイネの生育

を助けているのです。このように女性たちが重い負担を背負っている一方、男性たちは同じ農業でも質的に異なった作業に従事しています。意外なほどに、男女間に労働としての差があります。たとえば、お話ししたイネの畑からほど遠からぬところに精米所があるのです。畑でとれたお米を精米して仲介業者に売るところですが、そこで働いているのは男性ばかりです。取引では手ごわい業者も相手にしなくてははいけないので、男性でなければ交渉ができません。男女の違いは、労働面ばかりではなく、社会の中での役割にも差異があるのです。驚いたことに、女性たちが現金を手にする機会は決して多くありません。重労働をしているにもかかわらず、なかなか現金を手にする機会がないのです。精米所の男性たちにしても、必ずしもお金を扱っているとは限りません。扱わせてもらえないという事情もあるでしょうが、他方で、扱いたくても扱えないという現実もあるのです。つまり、お金の計算ばかりではなく、量り売りをするのができないという場合もあるからです。このお話だけからも、男女を問わずナイジェリアの若者たちが労働の場で直面している問題を理解してもらえたかと思います。このような社会にあって、彼女ら、彼らがどのような行動をとるかに注目してみましよう。

Area Boyとは

ラゴスという都市、その中心部に行くと30階建てのビルなども建ち並ぶ大都会なのですが、一般庶民が暮らす街区になると、ブロックでつくった、せいぜい3階か4階建ての建物が並んでいます。商店も少なくありませんが、きれいなディスプレイがあるというよりは、運ばれてきた品物や荷物がどんどんそこに積み上げられて、洋服なども、一見するところ無秩序にぶら下げて売られています。上述した農村部と同じようなところは、こうした商業地区でも、やはり店番をしているのが概ね若い世代だということです。店に雇われている若者もいますが、店にやっ

て来るお客さんが車を路肩に駐車している間、その番をしている者も少なくありません。そのような仕事でお金をもらうことが、ラゴスという大都会で彼らがお金を稼ぐ手段になっています。当然ながら、たいした金額は稼げません。1日の稼ぎでは、吊るしのTシャツ1枚すら買えはしません。そんな暮らしをしている連中の多くは、ラゴス生まれではなくて、実は農村地域から出てきているということなのです。

このラゴスという都市に住んでみて、幾度か気になる場面に遭遇しました。都会にはありがちなことですが、さまざまな嫌がらせをする輩がいるわけです。当然ながら、外国人は嫌がらせの対象になりますから、お金を持っていないくても、小奇麗な服を着ていなくても、こういう連中にとっては「このやろう」と感じたりもするのでしょう。それ自体はどこでもある話で、アジアだって、アメリカだって、時間帯と場所によっては日常茶飯事とも言えます。若者が誰かに因縁つけるのなら「まあ、仕方がないかな」と思うのですが、いい年のオジさんがこれをやるにはあきれました。ちょっとくたびれたオジさんがやってきて、お金をせびるという場面が少なくなかったのです。年嵩の女性というのはまずいませんでしたし、いわんや若い女性ということもありませんでした。大体、若い男性と中年にさしかかろうとするオジさんが、外国人に因縁をつけるような場面に遭遇するので、ちょっと厄介だなと思うことはありました。

一つエピソードがあるのですが、雇っていた運転手さんと一緒にラゴスの街中を走行していたときのこと、激しい交通渋滞でクルマがなかなか進まなくなりました。急いでもいたので、運転手さんの助言で近道をするようになったものの、そちらにハンドルを切るや、横っちょの方から若者ならぬオジさんがあらわれた。いわく「ここ通るなら通行料を払え」。「ここは公道なのに、何でカネを払わなくちゃいけないのだ」と言い返すと、「通常ここは通過できない道だから、カネを払え」の一点張

り。われわれも二人掛かり、脅したり、すかしたりしながら、振り切ってそこを通過しました。「あいつ一体何者なのだ」と改めて運転手さんに訊ねたところ、その答えは、聞きなれないArea Boyというものでした。初めて聴いた言葉でしたが、いい年のオジさんをBoy呼ばわりもないだろうというのが、そのときの偽らざる印象でした。若者、youth、the young、どのような言い方でもよいのですけれども、「若者って何者」という疑問がめばえたのは、この時が初めてだったかもしれません。

その後もArea Boyという存在が心にかかって、人に聞いたり、新聞や雑誌で探したりする中で、拡大を続けるラゴス都市圏で若者たちの集団による不法行為、嫌がらせとか、ゆすりとか、たかりとか、それに近い行為が目立ち始めていたことが分かりました。日本でも昭和30年代頃、「愚連隊」という言葉があったそうですが、そういうごろつきみたいな連中がたむろしていたと言われています。当時の日本も社会がどんどん変わっていた時代で、暴力も辞さない「チーム」が蔓延っていたわけです。こうした若者たちによる集団的な不法行為というのが極めて危険で、ナイジェリアの警察や治安機関すら手を焼いていたようです。その後に分かったことは、Area Boyという名称がナイジェリアではかなり一般化していて、ある地域を根城にしている若者たち、しかも集団で行動して、場合によっては、違法な、不法な行動をとる連中をArea Boyと通称していることでした。それはラゴスに限ったことではなく、農村地域ではBush Boyと呼ばれる連中が、それこそブッシュ（叢）から出てきて、集団で走行車両を止めて、お金をせびったりしているそうです。もっと過激に、やぶの中から車両めがけてタイヤなどを投げつけて、ことに及ぶ連中もあったようです。

ナイジェリアで「何とかBoy」と言われている若者の中には、やや毛色の違う輩もいるのです。ナイジェリア南部の石油産出地域には、オイルマネーが流れ込むために、犯罪が多発しました。そこで何が起こった

かということ、そうやって悪さばかりしている連中を思い切って自警団に
してしまえばいいではないか、と考えた知事さんがいたそうです。つまり
当の知事さんは、そうした若者たちを再組織して、泥棒や強盗を抑止
しようとしたわけです。若者たちによる「自警組織」として、知事さん
の手足となり、暴力によって暴力を押さえ込もうとしたのです。警察が
あり、裁判所があるにもかかわらず、警察権や司法権を全く無視して活
動を進めました。Bakassi Boysと称された「自警組織」のバックには
政治家である知事さんがいることから、警察もむやみには手が出せない。
そのようなことをしようものなら、知事さんに首切られてしまうからで
す。これは本当にたちが悪い問題で、その後起こったのが選挙暴力で
した。現職の知事さんと争う政治家たち、つまり対立候補たちを攻撃し
始めました。いまや知事さんの手下となったBakassi Boysの活動はエ
スカレートし、私刑（リンチ）も横行するようになったそうです。こう
して政治に巻き込まれることにより、若者たちはさらに暴力化してゆき、
社会の秩序を脅かす存在になってしまったのです。当初は「厄介なオジ
さん」という程度に考えていたArea Boyが、実は根深い社会問題だと
いうことに、ようやく気づいたのでした。

武装集団化とその指導者

1990年代以降、ナイジェリアの産油地域では、きわめて過激な若者
グループ（youth group）がいくつも出現し、その活動を活発化させて
いました。2000年前後には、それらがピークに達して、石油産業その
ものが危機に瀕する事態となりました。上述したように、豊富な石油の
富の存在が、若者グループの活動を刺激したと言って差し支えないで
しょう。もはやArea Boyのような小さな事件では済まされず、国家レ
ベルの問題になりました。若者グループが国家権力に対して反旗を翻す
ようなところに来てしまったからです。都市や農村で若者たちが悪さを

するという現象と、国家の富を生みだす地域で若者たちの集団が政府に反抗していくという現象、この両者の関係性というのは明瞭ではありませんが、その状況について紹介しておこうと思います。

1993年から1995年にかけて、産油地域で若者を組織して政府に反抗した人物（Asari Dokubo）がいました。もともとは裕福な家庭の子息であった彼が、どうして反政府的な活動を起こしたのか。しかも彼は、公然とナイジェリアの富の源泉である石油企業をターゲットにして破壊活動を始めたのです。以後、彼らをまねるような若者グループが幾つも現れた結果、彼はいわば反抗のシンボルとなり、政府を敵に回した若者というイメージをつくったのです。もちろん、ナイジェリア政府は彼を放っておかず、国家反逆の企てを首謀した人物として、彼を捕えて裁判にかけました。けれども、彼のバックにいる政治家たちが彼の支援を始めたのです。彼をうまく利用したのは、当時の政権与党に反発するような政治家たちであり、彼を担ぎ出し、あるいは背中を押して、与党の失点を印象付けました。それから2年もしないうちに、裁判で有罪を受けたにもかかわらず、彼が釈放されることになりました。

彼らの組織Niger Delta People's Volunteer Forceを、ここでは敢えて若者をメンバーとする武装集団と呼んでおきましょう。その名称に冠されたNiger Deltaというのは、ナイジェリアの国土を貫流する西アフリカの大川Niger River（ニジェール河）の河口部にひろがるデルタ地帯のことです。このNiger Deltaで石油が産出されるのですが、そこを守る自衛のための軍隊（Volunteer Force）というふうに自称しつつ、政府に対抗していたわけです。Niger Deltaには少数民族が多く居住して、もともと反政府的な動きも多かったのですけれども、独立直後から政府に反発していたこの地域の人たちが名乗っていたグループ名をほぼそのまま用いているのです。

彼らの組織が活動を始めた1990年代には、ちょうどオサマ・ビン・

ラーディン率いるアルカイダに連なる、あるいはそれを僭称するテロ組織が世界を跋扈していました。アフガニスタンで活動していた反政府活動家たちはMujaheedenとも称されていましたが、彼Asari Dokuboは自分の呼び名にこれを冠していました。そればかりか、もともとクリスチャンの家系に生まれ、イスラーム教徒ではないし、メッカ巡礼にも行っていませんのでAlhajiの称号は持っていなかったにもかかわらず、これもくっつけて、Alhaji Mujaheeden Dokuboを名乗っていたのです。自分たちがテロ行為も辞さず、政府に対抗する組織であるということを組織名や名前以示唆しようとしたと考えられます。

その背景には、彼の転落の軌跡といったものがあります。彼は大学にも通っていたのですが、学業からはドロップアウトしてしまいます。上述したように裕福な家系の生まれで、父親は成功したビジネスマン、母親の家系もまた裕福で、何不自由なく育ったと言われていますが、大学は退学してしまったようです。その後、自らの家柄を利用して地方選挙に打って出ます。日本の県議会にあたる州議会の議員でしたが、こちらも落選してしまいました。つまり彼は、学歴を掲げて社会に出ていくこともできず、また家の力を利用して政治に出ていくこともできなかったのです。八方ふさがりになったところで、政府に対抗して地元で生まれた青年組織に加わりました。大学からのドロップアウト、政治に対する失望に加えて、一つの青年組織に加わったことが、上述した新しい武装集団を組織する背景をなしていたということが分かります。さらに、青年組織に入ってはみたものの、組織内部でまたメンバー同士の内部抗争、つまり青年同士の対立があって、バックにいてくれたはずの政治家からの資金援助などが得られなくなり、ライバルに敗れるというようなこともあったらしいのです。

後日談として、懲りないこの人物Asari Dokuboは、2007年に釈放されるや間もなく、彼の出身地の州知事選挙に立候補します。予備選挙で

敗れてしまうのですが、懲りない以上に、政治に対する志向が強い。ナイジェリアという国で、富に見放されないために、あるいは力を失わないために、何が大事であるのかがここからも分かります。何よりも政治に関わること、そして自分のバックに立ってくれる政治的なパトロンを見つけることによって、自分の存在感を示し、あるいは自分の力を得ようということになるのかもしれませんが。

地域社会と若者

以上のケーススタディから何が見えてくるのでしょうか。人びとの生活の場として、地域社会とかコミュニティとうものがあります。そこに居住する人たちは、地縁、血縁でも結びついています。その地域社会やコミュニティにおける年齢階層、つまり世代の違いみたいなものが一つ大きく作用するのではないかと、ということなのです。日本でも、かつて若者たちを組織して、社会に統合していく、あるいは社会のやり方を若者たちに教えるための仕組みというものがあったと言われています。そのためのグループがあり、それは若者組あるいは若衆宿と呼ばれて、若者たちが寝起きをともにして、先輩から後輩に、社会のあり方や秩序、地域社会のルールなどを伝えていったそうです。この仕組みはアフリカ社会にも共通したもので、むしろアフリカ社会の方が年齢階層はもっとはっきりしています。年齢階梯を上がってゆかなければ社会の中で一人前として認められません。例えば、皆さんはよく「酋長さん」という言葉を物語の登場人物として耳にしたと思います。この「チーフ (chief)」という呼称、あるいはタイトルとしての「チーフ」をもらえるかどうか、その地域社会で幸せな人生を歩めるかどうかのカギにもなります。たとえ家が貧しくても、社会的に認められる首長、酋長としての地位があれば、人びとからの尊敬も得られるし、また地域社会の中でも認められた存在として暮らしてゆけます。けれども、なかなかそれが叶わないのも

現実で、さらに年齢集団の間で様々な問題が生じてくるということもここで知っておきたいところです。上述したように、地域社会における役割というものがあって、酋長のタイトル、あるいは、いろんな責任ある地位をもらえるということは、その社会の中での確固たる自分の足場があるということに他なりません。しかし、そうした地位はなかなか得られないというわけです。

自分自身も日本のコミュニティでの経験を通じて、アフリカ社会における年齢階梯、その内部序列というようなことを実感できました。もし自分がいつまでたっても若者の域を出られなかったら、成熟した年齢に達したにもかかわらず地域社会に認められなかったら、自分はどんな気持ちになってしまうのかな、と考えさせられました。「年齢階梯」という概念は人類学の用語で、ある年齢に達すれば、それに相応しい社会の役割があり、そのために必要な資財とか、あるいは人望とか、その他もろもろが求められるのです。ところが、今日のアフリカの若者は仕事がなかなか得られません。何より現金がなかなか得られない若者たちは、地域社会の役割を担うための条件を満たすことができません。そのため社会の階梯、つまり階段を上ってゆけないという現実があるのではないか、と推察できます。これは人類学者たちが分析していることとも一致しているところで、専門家たちはもっと厳密な見方をするので、その点は注意をして聞いておいてください。

地域社会とこれを取り巻く状況ということを、もう少し補足しておこうと思います。実際には地域社会の内部の問題だけではなく、他にも様々な問題が起こっています。一言に「チーフ」といっても、それには首長や酋長という地域社会のトップもいれば、役割別、機能別の「チーフ」もいるわけです。例えば、音楽のチーフとか、あるいは祭りのチーフとか、あるいは村の道を整備するチーフといったものが地域社会ごとに置かれていますが、やはり数の上では限界があります。かつてのアフ

リカ社会では、子どもたちがたくさん生まれる。一夫婦に子ども10人なんて当たり前でした。けれども、そうした子どもたちで成人を迎えることなく亡くなる者も少なくなかったのです。ところが、アフリカ社会も変化してきました。外国からの支援もあって、多産多死、つまりたくさん生まれて、たくさん死んでしまうという社会から、たくさん生まれても、医療サービスが受けられることによって子どもたちが命を落とすことがなくなる、つまり多産少死に移行していったのです。結果的に、人口が膨れ上がり、居住地に人口が滞留して、過剰人口になってしまいました。地域社会、コミュニティの中でも、同じことが起こったであろうことは、容易に推察できます。

それからもう一つ、アフリカ社会を考える上で忘れてはならないのが、地域社会の経済的な疲弊という問題です。皆さんもご存じのように、アフリカ以外の途上地域、アジアやラテンアメリカが、先進国のレベルには届かないものの、経済発展のスピードを速めて、だんだんに豊かになってきています。これに対してアフリカの経済はそのスピードに追いついていません。人口は増えているけれども、経済が拡大しないという状況の下で、行政の機能やサービスが人びとのニーズに追いつかない、あるいは社会の機能が追いつかないということが起こってきました。このため地域社会そのものが疲弊してしまいます。若者たちはそうした中に身を置いているということなのです。つまり、アフリカの経済、あるいは社会が今はまだ低開発というか、発展途上の状況から抜け切れない理由の一つは、グローバリゼーションが非常なスピードで進む中で、新しい経済の形、新しい経済の発展の仕方というものになかなか自らを合わせられない、アジャストできないというところにあるのではないかと考えています。そうした社会に生きる若い世代、若者、青年が抱く感情、とりわけ不満というものは相当に大きいという気がしています。

まとめ

今日、アフリカ社会の厳しい状況の下に置かれた若者たちは、どのような行動に出ているのでしょうか。そこで生じる経済的・社会的不満に対して、若者ならずとも、何かに捌け口を求め、何らかの形でその状況を打開したい、そこから抜け出したいと考えているに違いありません。そのときに、自らの命を絶ってしまうというケースも実は少なくないのです。ナイジェリアでは自殺者が増えており、この点で日本とも似ています。人口大国ゆえにチャンスをつかむ機会の少ない社会ですから、自ら退出するしかないのかもしれない。それにも増して問題なのは、若者自らに残されたものは肉体だけなので、それにより行使できる暴力に依拠してしまうことです。暴力の対象となるのは、身近な地域社会から国家まで、自らを取り巻く社会のすべてです。その結果として社会は暴力化し、犯罪化してゆくことになります。こうした状況の下で若者たちの考え方がどうなるかという、善悪とか秩序ではなく、より政治的な発想で行動するようになります。自分をサポートし、自らのパトロンになってくれる者であれば、どのような政治的信条を持つ人物であっても、つき従ってゆく。盲目的に政治家に追随し、その「飼い犬」になり下がってしまう。州知事が組織した自警団の話をしましたけれども、若者がこうしたものにはしる状況が、たしかにナイジェリア社会には存在するのです。

最後に申し上げたいのは、こうした変化はアフリカ社会だけのそれではなく、世界全体にみられる変化でもあるということです。我々の地球社会というものがグローバリゼーションの中で大きく変質しています。この変化が、各国の社会あるいは経済を変え、さらに地域社会を変質させているのです。そのような変化の中で若者はどのようにして生きていくのか、若者は何に期待したらいいのか、ということこそ今考えるべき問題に他なりません。若者の問題、青年の問題を、年配の人たちが自ら

の経験を振り返りつつ語るのではなく、今を生きる世代が自分で考えなくてはいけないのです。それらについて具体的な方策、打開策として考えてゆかなければ、おそらく若者たちは納得しないし、また社会における解決策にもならないでしょう。

もう一つ、ナイジェリア社会を見ていて非常に危険だと思うのは政治家の影響です。特に富裕層の中にいる有力者たち、彼らによる政治的な操作です。こうした操作から若者たちを遠ざける、若者たちを守ると口では言えますが、実際には無理かもしれません。それでも、若者たちの目をどこか別なところに引きつける可能性はあると思われ、それを考える必要があります。既存の権力関係から距離を置いて若者に動員をかける、若者たちが自らのエネルギーを違った方向に振り向ける、政治とは一線を画した活動に身をゆだね、そちらにエネルギーを使えるよう導く必要がある、と思います。それを考えるのは、他ならぬ若者世代の皆さんですから、これから連続研究講座でお招きする方々から提示される幾つかのテーマを通じて考えてもらえたらと思います。

以上